

水辺の生物

マツモムシ (松藻虫)

カメムシ目 (半翅目)・マツモムシ科



写真提供
大阪府水生生物センター

マツモムシは、体長12~14mmほどの水生カメムシの仲間で、池沼などの静水域に生息する。マツモムシ科の昆虫は、日本では3属11種が知られており、北海道から本州、四国、九州に分布する。マツモムシ (松藻虫) という名前は、マツモなどの水草が繁茂する池や沼に生息することから付けられた。背面には灰黄色で黒色の斑点とビロードのような光沢があり、体は細長い楕円形、触角は短く、鋭い口針をもつ。

成虫で冬を越すが、真冬でも気温が上がると活動し、早春には姿を見せ、交尾・産卵する。産卵は水面に浮かぶ落ち葉などの下面に100個位の卵を産みつけ、ふ化した幼虫は7~8月頃に成虫となる。

体に比べてとても長いオールのような後脚をもち、この脚を使って背面を下にして巧みに泳ぎまわり、水面のすぐ下で、頭をやや下げて獲物が来るのを待っていることが多い。これはマツモムシが腹面に多量の空気を蓄えており、浮心が重心よりも腹側にあるため、腹を上にして泳ぐのである。ただし、全速で泳ぐときは、腹面を下にして泳ぐ。

英名は「ボートマン」、泳いでいる姿がボートを漕いでいるように見えることから付けられた。または「バックスイマー」(背泳ぎ虫)ともいう。

マツモムシの食べ物は、おもに水面に落ちた昆虫や水生昆虫、小さな魚などで、獲物を捕まえると、ストローのような口針を獲物に突き刺して体液を吸う。この口は針のように鋭く、素手で捕まえるとこれで刺すことがある。ハチに刺されたときのような痛みが走るので、採集の際は注意が必要である。

取材協力 小西正泰氏

参考文献 『原色昆虫大圖鑑 Ⅲ』 北隆館 1965年

『昆虫の事典』 古川晴男監修 東京堂出版 1970年

『水生昆虫の観察—安全できれいな水をめざして』 谷幸三 トンボ出版 1995年

『日本動物大百科』第8巻 昆虫1 日高敏隆監修 平凡社 1996年

ホームページ「大阪府環境農林水産総合研究所水生生物センター」